

令和2年度

ほがらか家族

明るい家庭づくり作文集
(瀬戸内市優秀賞受賞作品)



瀬戸内市教育委員会

岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会

はじめに

公益社団法人岡山県青少年育成県民会議及び岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会では、家庭の役割、家族のあり方など、「明るい家庭づくり」をテーマとした作文を募集しており、家庭教育等の重要性について意識の向上に努めております。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により応募数こそ減少しましたが、小・中学生の部ではコロナ禍における家庭の様子が、保護者の部では子育てをしながら感じたこと・気づいたことが綴られた力作が揃いました。その中から瀬戸内市の優秀賞14点、優良賞27点及び佳作賞32点を選定しました。

この文集「ほがらか家族」は、瀬戸内市の優秀賞作品を掲載したものです。この文集が、家庭の教育力の向上の一助となり、青少年の健全育成につながることを心から願っております。

令和3年2月

瀬戸内市教育委員会 教育長 東南 信行
岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会 会長 神坂 俊規

瀬戸内市優秀賞一覧

〔小学生の部〕

題 名	所 属	氏 名
げんきになってね おばあちゃん	邑久小学校 1年	畑 遥 乃
「夏休みのあさ」	牛窓北小学校 2年	井 上 夢 萌
かめの『か』会ぎ	邑久小学校 3年	河 合 優 奈
「家族で植えた夏野さい」	牛窓北小学校 4年	山 根 萌 愛
ファミリー運動会	行幸小学校 5年	堀 元 千 聖
大好きなおばあちゃんのために	今城小学校 6年	大 取 未 知

〔中学生の部〕

ひいじいちゃんの日誌	牛窓中学校 1年	床 和 歌 乃
兄の存在	長船中学校 2年	竹 中 祥 貴
わが家の夏祭り	長船中学校 3年	新 田 栳 乃

〔保護者の部〕

息子がくれた青春	長船中学校	竹 内 直 樹
物を大切にすること	行幸小学校	東 田 実 香
いつもと違う、いつもの夏休み	行幸小学校	板 野 景 子
会話で気付くこと	行幸小学校	小 林 未 弘
私と子どもとマッサージ	行幸小学校	森 本 章 江

小学生の部



げんきになってね おばあちゃん

邑久小学校 1年 畑 遙乃

なつやすみになりました。

「ばあばのおうちへ、おとまりにいきたいな。」

わたしは、おかあさんにおねがいしました。すると、

「ばあばがげんきになってからね。」

と、おかあさんからへんじがかえってきました。おばあちゃんは、たいちょうのわるいひがつづいているみたいです。わたしは、おばあちゃんのことをがしんぱいになりました。それから、はやくげんきになってほしいとおもいました。

おばあちゃんにはやくげんきになってもらうために、わたしはちぎりえをおくることにしました。おばあちゃんの大すきなごしよくをえらんで、にじのえにありがみをちぎってはりました。つくりながらおかあさんと、おばあちゃんのことをたくさんおはなしました。

おばあちゃんのいえへとまりにいくと、ケーキをつくります。こなとバターをまぜてもんだり、ケーキのそこにあながあかないようにきじをひろげたりするのが、わたしのやくめです。さいごのかざりつけをしていると、ブルーベリーがたべたくなります。わたしが、

「たべたいな。」

というと、ぱくつとくちへいれてくれます。それからおばあちゃんもぱくつとたべて、

「おいしいね。」

といって、にこにこわらいます。ふたりでつくったケーキは、おじいちゃんやわたしのかぞくも、

「さくさくしておいしいね。」

と、よろこんでくれます。

ちぎりえがかんせいしました。ねるへやにかざって、からだがしんどいときにみてほしいです。はやくげんきなばあばに、あいたいな。



「夏休みのあさ」

牛窓北小学校 2年 井上 夢萌

夏休みのあさは、ジリジリあつくて、せみがミーン、ミーンとうるさいです。そのとき

「ゆめちゃん、おがむよ〜。」

と、ばあばがさそってくれるので、さいだんにむかって、いっしょにおがみます。

まずはじめに、さいだんのまわりにあるでんきのスイッチをぜんぶカチカチカチとつけて、ちょうちんにでん気をつけます。

つぎに、せんこうとろうそくに火をつけます。わたしは、いちばん前のざぶとんにすわっておがむやくです。かいうすをまちがえないように、こっそりとゆびをおりまげて、数えています。さいしょとさいごには、チーンと、2回ならします。ぼうをあてるばしょによって音がぜんぜんちが

います。はじめのほうは、あててもじょうずにひびかなかったり大きな音がだせなかつたりしました。

「どうやったらじょうずにできるのかな？」

と聞くと、

「そとのふちにじょうずにあてるといいよ。」

と、おしえてくれました。

毎日やっていると、とてもうまくできるようになりました。おきょうもすらすらと言えるようになりました。ぜんぶ言いおわると、

「まちがえずに言えた～」

とすっきりします。わたしがおがんでいるおきょうが、ひいおじいちゃんや、ひいおばあちゃんにきこえていて、

「じょうずだったよ。」

といてくれているとうれしいです。

はつぼんだっひいおばあちゃんは、おぼんがおわるとぶつだんにかえります。これからはぶつだんでおがみます。



かめの『か』会ぎ

邑久小学校 3年 河合 優奈

私の家族は、長い休みのときにはかならずりょ行します。けれども、今年のゴールデンウィークは、新がたコロナウイルスのえいきょうで、遠くに出かけられなくなりました。

そこで、ゴールデンウィークを楽しくすごせるように、話し合いをすることにしました。お父さんがぎ長で、お母さんが司会、私が書記で、妹たちが意見を出す係です。

まず、話し合いを楽しむために、会ぎの名前を考えました。「河合家会ぎ」や「ワクワクルンルン会ぎ」という名前が出たけど、どれもぴんとこなかったの、3才の妹りんなに、

「どんな名前がいい？」

と、聞いてみました。するとりんなは、

「かめの『か』！」

と、さげびました。それを聞いてみんな、大ばくしょうしました。りんなは、かめが大すきなのです。わらいながら、お母さんが、

「かめの『か』は、河合の『か』だね。」

と言いました。みんながえ顔になったし、河合の『か』だから、話し合いの名前は「かめの『か』会ぎ」に決まりました。

つぎに、自分ができる家の手つだいを考えました。私は「台ふき・タオルたたみ・妹のせわ」をすることになりました。5才のかんなは「そうじ」、りんなは「せんたくものはこび」です。妹たちの手つだいがかんたんでうらやましかつたけど、私はあまり手つだいをしていないから、がんばることになりました。

さい後に、みんなでやりたいことを考えました。「おさんぽ」や「しずかにすごす」など、いろいろな意見が出ました。その中から、一人一つ、えらぶことになりました。お父さんが「ハイキング」、お母さんが「絵をかく」、りんなが「かき氷作り」、かんなが「ようちえんごっこ」、そして私が「おかし作り」をえらびました。「おかし作り」では、作ったことがないフルーツたつぷり

のゼリーを作りました。ちょっぴりあまくて、おいしかったです。家族みんなですると、ぜんぶ楽しかったです。

中でも1番楽しかったのは、ハイキングです。山を下るときは、音楽をながしてうたをうたいました。えいがのモアナのうたです。お母さんもりんなもかなも、モアナにはまっています。私もうたをおぼえていたし、人がいなかったから大声でうたいました。けしきもきれいで、ちょうどモアナに出てくるような海も見えました。みんなでうたいながら歩くと、すごく楽しかったです。

「かめの『か』会ぎ」のおかげで、家族みんながえ顔になりました。りょ行しなかったぶん、みんなですぐす時間がふえて楽しかったです。この夏の「かめの『か』会ぎ」では、前より楽しめることを考えて、なかよくすごしたいです。

「かめの『か』会ぎ、楽しみだな～！」



「家族で植えた夏野さい」

牛窓北小学校 4年 山根 萌愛

「今年は、畑で何の野さいを植えようかなあ。」
と、お父さんが、お姉ちゃんとわたしに聞きました。

わたしは、毎年植えているトマトやキュウリなどかなと思いましたが、今年は、ちがった野さいも育てたいと思いました。さっそく、お父さんとお姉ちゃんの3人で、野さいのなえを買いに行きました。買ったのは、キュウリ、トマト、ピーマン、オクラ、ナスと小玉スイカのなえです。小玉スイカは今まで育てたことがなかったので、初めて植えてみることにしました。

そして、わたしが小玉スイカとトマトを、後は、お姉ちゃんが植えました。畑は、お父さんがたがやして、ひ料なども入れて用意してくれたものです。植え方もどこにどの野さいを植えたらいいか教えてもらいました。

暑くなって、毎日水やりをするのは、お父さんの仕事でした。夕ご飯のときに、どれだけ生長しているのか教えてくれました。さい初に、ピーマンとトマトに実ができて、何日かたつと、ナス、オクラ、キュウリと小玉スイカにも、すべてに実ができたので安心しました。

「今年は、雨がよくふった後、暑い日が続いたので、野さいができるか心ばいだ。」
と、お父さんが言っていたからです。

でも、これから、できた実が大きくなるか、虫に食べられないか心ばいになりました。心ばいをしていましたが、ピーマンが五つぐらいとれました。家族でそうだんして、チンジャオロースをお母さんに作ってもらいました。とれたてでしんせんで、みんな

「おいしい、おいしい。」
と言って食べました。

ナスもキュウリも、毎日、食べきれないくらいとれました。お母さんが、あきないようにスマホでしらべてちがった料理を作ってくれました。また、お父さんが、キュウリでつけ物を作ってくれました。キュウリは、実ができると、ちょっと見てないとあつという間に大きくなったり、たくさんとれてこまったりすることがあったりしました。

オクラは、大きすぎると、かたくなって食べられないので、毎日見ないといけないので大へんでした。お父さんまかせにしないで、わたしもとりましたが、なれてきてできるようになりました。

わたしがそだてたかった小玉スイカは、小さいときにくさってしまったり、大きくなっても、中がからになってしまったり、虫に食べられていたりするものがありました。何かはできて、暑い

中、水分ほきゅうにもなりよかったです。

来年も、今年じょうずにできなかったことをなおして、作ってみたいです。また、料理もお母さんといっしょに作ってみたいです。家族みんなできょう力して作った野さいで。



ファミリー運動会

行幸小学校 5年 堀元 千聖

「今年のゴールデンウィークは、家でファミリー運動会をするよ。」

こんなお母さんの一言で、5月4日にファミリー運動会をすることにしました。

今年のゴールデンウィークは、新型コロナウイルスのえいきょうでサッカーの試合もなくなり、遠出もできないので家でできるスポーツを組み合わせたミニ運動会を考えて、前日にお兄ちゃんとプログラムを作りました。運動会当日の流れがスムーズに行くように、種目ごとのルールも決めました。例えば、バドミントンは、シングルスで21点先取、それぞれ勝ち点5ポイント、負け2ポイントと決めました。

5月4日、いよいよファミリー運動会のスタートです。

初めに、お父さんが来ひんのあいさつをしました。お父さんの服そうは、ジャージです。コードレスマイクもあります。マイクは、ラップのしんとガチャガチャのカプセルを使って、ぼくとお母さんで作りました。

次に、ぼくが選手せんせいをして全員でラジオ体そうをしました。朝からとてもいい天気です暑かったので、参加賞のアクエリアスがお母さんから配られました。

種目は、ブタさん、手おしずもう、バドミントン、たつきゅう、シューティングスターです。ゆう勝景品は、お兄ちゃんはマンガ2さつ、ぼくはゲームのアイテム、お母さんはケーキ2こ、お父さんは自分の車用品をかけて戦いました。

お昼ごはんは、バーベキューをしました。おやつに、ホットケーキを焼いて食べました。とても暑かったので、水遊びもしました。

運動会の結果は、ハンディなしの本気の勝負だったので、お兄ちゃんがゆう勝しました。ぼくは4位でした。一生けんめいがんばったのでくやしかったです。

運動会の最後には、サプライズゲストが登場しました。東京に住んでいるお母さんの弟のかずくんです。スマートフォンの動画で来ひんの閉会のあいさつをしてくれました。なぜか、かみの毛を七三分けにしてまじめな顔であいさつをしてくれていたのがおもしろかったです。

本当は5月に小学校の運動会が行われる予定でした。でも、新型コロナウイルスできん急事態宣言が出て、ステイホームをしないとイケない生活の中、たくさんの行事が中止になってしまいました。けれど、こんな風アイデアを出し合えばとても思い出に残るイベントができます。こんな時だからこそ家族で経験できることもあります。マスクなしで外出できたり、いろいろなチームとサッカーの試合ができる平和な日常が少しでも早くもどることを願って、今出来ることを家族みんなできいっぱいやりたいと思います。



大好きなおばあちゃんのために

今城小学校 6年 大取 未知

おばあちゃんが、7月に入院しました。なぜなら、股関節がいたくて人工股関節にかえる手術をするからです。私は、おばあちゃんが手術が必要なほど足がいたかったなんて知りませんでした。きっと、私達に心配させないために言わなかったんだと思います。

入院する時私は、コロナウイルスの感せん予防のため病院について行く事ができません。お見まいも、子供は病院内に入る事はできません。だから、手術の事や入院の事はお見まいに行ったお母さんから聞いたり、電話やメールで聞いたりしました。直接は会えなかったけれど、入院中はどんな生活をしてたのか知る事ができました。私が学校から帰ると、仕事が終わったお母さんは病院へお見まいに行っているの、その間私は留守番をしながら洗たく物を取りこんだり、ご飯をたいたりとお手伝いをしっかりしました。一人でやるのは大変だったけれど、お母さんに、「ありがとう。助かったよ。」

と言われてうれしかったです。それで私も、おばあちゃんに会えなくても、おばあちゃんのために何かできるんだなと思いました。手術をした後は、リハビリが続いたそうです。おばあちゃんは、入院していた中で、リハビリが1番しんどかったと言っていました。それでも、手術をして1ヵ月位で歩けるようになっていたので、努力したんだろうなと思いました。私は、お見まいに行けなから、きれいな折り紙で箱を折ってお母さんに持って行ってもらいました。

退院する時は、私もいっしょにむかえに行きました。久しぶりに会えて、元気そうな姿を見て安心しました。帰ってからは、おばあちゃんの家冷蔵庫がからっぽなので、近所のスーパーへ買い物に行きました。いつも何でもできるおばあちゃんだけど、足に負担が無いように重い荷物を持ってあげました。家に帰って、みんなで話をしているとおばあちゃんが、「折り紙の箱ありがとう。きれいに作れてたね。ありがとう。」

と言ってくれました。かん護師さんにも、よかったねと言われてうれしかったそうです。これを聞いて私も、うれしくなりました。

私は、もし自分が入院することになったらと考えてみました。きっと、一人でさみしいだろうし、リハビリが大変でやめたくなると思います。でも、それを乗り越えたおばあちゃんはずいと思いました。おばあちゃんはこれからの生活で不自由な事が出てくると思います。だから、今度は私が買い物や家事を手伝って支えていこうと思いました。おばあちゃんには、これからもずっと元気なままでいてほしいと思いました。

中学生の部



ひいじいちゃんの日誌

牛窓中学校 1年 床 和歌乃

終戦75年を迎えた今年の8月15日、お盆に親せきが集まり、戦争についてのテレビ番組を見て語り合っていた。そのとき祖母がテレビに映った戦艦大和の船内の紹介の場面で突然叫ん

だ。

「この人、お父さんかもしれん！」

と、写真を取り出して来て、家族みんなが今までにない興奮と笑顔につつまれた。私は、あまりそのことに興味がなかったが、戦争で生き残ったという曾祖父の話を聞いて心のすみで少し驚いていた。

「なぜ、戦争で生き残れたのかはもう亡くなっているからたぶんわからないよな。」

と、祖母は知らない間に興味を持っていた私に曾祖父の日記を渡してくれた。その日記には毎日の一行日記のようなものがあり、曾祖父の生々しい戦争体験が描かれていた。そして祖母や母も知らなかった曾祖父が乗った数々の艦についてタイムスリップして知ることになる。

それは曾祖父が21才の時、海軍に入隊していた時のことである。機艦兵として1番最初に乗った船は重巡洋艦最上だった。1000人くらい乗れる大きな艦だったらしい。その後、潜水艦に乗り、曾祖父は有名な真珠湾攻撃にも参加している。日記の中で「爆雷も接近し腹わたをガンガンとえぐられる様だ。」と書かれていた。この時の戦いで1ヶ月近く海の中で生活しており艦内の空気はにごり、汗がとめどもなく流れ、疲労も極限だったらしい。その中で残しておいたビールを戦友と飲んだことが書かれており、ものすごくおいしかったと書いてある。やっと水上にあがり太陽を見られたときはまぶしすぎて目が開けられなかった。この真珠湾の戦いで何せきも艦が沈んだらしく、私は生き残ったのもすごいけど生きるか死ぬかの毎日を何日も過ごしていたかと思うと言葉にできない恐怖を覚えた。父はいつも気楽にビールをおいしそうに飲んでいるが、太平洋戦争では命がけて飲んでいたので。毎日あがっている太陽もあたり前ではないのだ。

その後曾祖父はミッドウェー作戦にも従事し、米軍の空母ヨークタウンを撃沈した。この時の日記には死ぬかもしれないと書いてある。爆雷で沈みそうになった艦を何度も修理し奇跡的に帰艦している。潜水艦は過酷だったのだろう。特設巡洋艦栗田丸に乗りかえ、特務艦として艦艇を補佐した。給炭、給油、給糧、測量などの重要な任務だった。最後はシンガポール沖で敵の攻撃にあい沈没したが、陸まで泳いで助かったそうだ。終戦後シンガポールから日本に無事帰ってきた。

そんな不死身の曾祖父も生きていたら102才になっていたが、68才でガンで亡くなっている。生きていたら戦争の体験をもっと聞いてみたかったが、日記には曾祖父の思いがいっぱいつまっていた。曾祖父の字は達筆で読めない所がたくさんあったが母と一緒に解説していった。母は、

「何度も危険なめにあっても生きて帰ってくれた。感謝しないといけんね。死んでたらお母さんもあんたも生まれてきてないんだから。」

と言った。私は、

「そうよね。生きて帰ってくれて本当に良かった。だって、こんなすごい人が曾祖父なんよ。めっちゃうれしいわ。」

と曾祖父に感謝した。

生前の曾祖父はとても手先が器用な人で絵がとても上手だった。こわれた自転車もすぐ直していたらしい。とても物を大切にしていた。それはそうだ、戦争の時も何度も攻撃をうけて漏水した艦を修理して帰艦していたのだから。この日記で曾祖父が私に伝えたかったことが浮かびあがってきた。一日を自分のことに使えるのはあたり前ではない時代があったのだ。

この日記を読んだ私は、自分が時間を無駄にしていることに気がついた。曾祖父は国のために命をはって生活していた。では私は国のために命をかけられるだろうか。しかし国という言葉が私にはピンとこない。私は家族のためでもなく国のためでもなく自分のために生活している

いのだろうか。いや曾祖父やたくさんの日本兵が守った日本の未来を受けつがえないといけない。そのために日本に役立つ人になりたい。まだそれが何からかわからないが、その時から考えるようになった。私はこの13才になる年にこの日誌に出会えたことに感謝した。曾祖父のプレゼントだと思う。将来の道がまた広がった。そして、また明日も家族と共にあたり前でない幸せな朝を迎える。



兄の存在

長船中学校 2年 竹中 祥貴

今年の春から兄は大学生になり、岡山県を離れることになった。

僕は自分の部屋を持っていなかったので、兄が出て行くことで、兄の部屋が自分の部屋になるのがすごくうれしかった。そして、兄によくゲームとか、いろいろ邪魔をされていたので、その邪魔もなくなりうれしかった。

兄の大学が決まったとき、家族から、「お前、絶対、寂しくなって泣くやろ。」と言われた。

そして、引っ越し当日、僕と兄は新幹線で、父と母、姉は車で行った。引っ越し先に着き荷物を入れたり、整理をしたりして、半日が過ぎた。昼食を食べ、少し休憩をして、兄を置いて帰ることになった。

帰るとき僕は泣かなかった。

さすがに、この年で、兄がいなくなるだけで泣くなんか、恥ずかしいと思ったからだ。

けど、少しは寂しい気持ちが出てきた。最初に邪魔をされるといったけど、それほど僕にかまってくるので、仲は良かったのだ。だから、少し寂しくなってくるのは当たり前だと思う。

翌日、兄の部屋を自分の部屋に変えるために兄の荷物を片付けていると、紙になんか書かれてあった。兄の字で「寂しいだろう」と。

別に、僕はなんとも思わなかった。これは本当だ。急に寂しく感じたりしていない。

自分の物を入れる前に掃除をしようとする、これがまたすごく汚い。机の下からプラスチックの細かい破片が何個も出てきたり、部屋のすみにほこりがたまったりして、これだけで1日はかかった。その翌日にやっと自分の荷物を入れて、自分の部屋らしくなった。

学校が休校から開放されて、2年生がスタートした。学校から帰っても兄はいない。当たり前だ。だって、県外に引っ越したから。でも、兄が高校生のときもこんなのが日常だった。だから、自分は、兄がいなかった環境に少し慣れていたのでと思う。けど、部活で朝が早いときには、兄と一緒に朝ご飯を食べていたので、その面は少し寂しい。2週間もしたら、なんか慣れてきた。

僕の学校が始まって1ヶ月、再び休校になった。さらに兄の大学も休校になり、岡山に戻ることになった。少しうれしかった。けど、「また邪魔されるな」とも思った。でも、この期間で初めて兄の存在のありがたみを感じた。それは兄が引っ越しするまで暇なときにキャッチボールやバッティング練習を手伝ってくれたり、一緒にランニングをしてくれたりしたことだ。今、思い返せば、良いことの方が多かったからかもしれない。さらに1学期の期末テストの勉強のときも、わからないところを解説してくれたり、苦手そうところから問題を作ってくれたり、どこのところを中心に勉強したら良いかとかいろいろ勉強面でもお世話をしてくれていた。そのことを自分は

多分当たり前とっていたから、兄の存在のありがたみに気づくことができずに、気づくのに時間もかかってしまったのだと思う。

しかし、やっぱり邪魔という自分がされて1番嫌いなことをしてきやがった。僕が一人でお風呂に入っているとき、電気を消したりしてきやがった。そこで、僕はお風呂場の壁を「ドン」とけってしまった。軽くけったつもりが、血迷って強くけってしまった。壁を見ると・・・僕はやらかした。なんとそこにはひびが入っていた。そこで僕は、「これはあいつのせいだ」と思い、「これは兄がしたことでしょう」とした。すると母と父はもうこれまで以上見せたことのない怒りを見せた。

その後、プラスチックの板でひびのところをカバーして直したとは言わないけど、なんとかなった。

その3日後ぐらいに兄は戻った。みんなで新型コロナに気をつけながら兄を車で送った。帰るとき僕は、「また、あの暇な日常に戻るのかあ」と少し寂しい気持ちになって岡山に帰った。

僕はそこで誓った。「兄、たった一人が大きな存在かもしれないけど、これを大きな壁と思っていたら、野球でピッチャーなんか務まらない。」と。このことを胸に今も兄がいなくてもがんばって、誕生日のときにはテレビ電話をしたりして、楽しくやっけていける。

今まで同じ家で仲良くケンカしながら過ごしてきた時間は振り返りきれないほど多く、野球をしているときと同じくらい楽しかった。でも、その楽しさを当たり前のようにとらえていた僕は本当にバカだと思う。「たかが家族一人」と思っていたけど、兄と暮らす時間が大幅に減った今、「されど家族一人」と強く思った。



わが家の夏祭り

長船中学校 3年 新田 椋乃

「これは名案だ。」

私は、とてもわくわくすることを思いついてしまった。それは、夏休みのある一日のことだ。

大好きな部活を引退した翌日、私はとても暗い気分になっていた。これからは、部活ではなく、勉強に集中しなければならない。それだけでも憂鬱なのに、なんとといっても今年は、新型コロナウイルスのせいで、楽しい夏のイベントも全て台無しだ。毎年楽しみにしている家族旅行、お盆におばあちゃんの家へ行くこと、そして友達と行きたかった夏祭り。わくわくするイベントがないと、なんだか夏休みのかんじがせず、楽しむことができずにいた。そんなとき、私は思いついてしまったのだ。暗いムードの新田家を明るくするイベントを。それは「新田家夏祭り」だ。中止になってしまった夏祭りを自分達の手で開催するのだ。私はすぐに、母と弟に提案した。

「お家で夏祭りがしたいんだけど、どうかな。」

二人はすぐに賛成してくれた。

「ぼく、射的したいな。」

「いいね。早速、家族会議する？」

私の予想通り、わが家は少し明るくなった。

会議の結果、夏祭り開催は4日後の夜になった。工作が得意な弟は、射的の屋台を開き、料理好きの私と母は食べ物担当となった。さらに、毎日仕事をがんばっている父には秘密にすることにした。私達は、祭りに向けて工作をしたり、レシピを調べたり、一緒に昼ご飯を食べながら話し合ったりしながら、父に気づかれないように準備をすすめた。

こうして迎えた夏祭り当日。この日は父がお昼に帰ってくる。私は、父に渡す祭りの案内を作り、

父の帰りを待った。

「はやくお父さん帰ってこないかな。」

父に祭りのことを言いたくてうずうずしていた弟は、父の帰りを待ちきれない様子だった。少し前までは、秘密は絶対に守れない人だったのに、今回は最後まで言わず我慢した弟の成長を感じていると、車の音がした。

「お父さんだ。」

私は、父が居間に入ってくると1番に、

「今日、新田家夏祭りするよ。来てね。」

と案内の紙を渡した。仕事で帰りがおそい父とは、ゆっくり話をする時間が減っていたが、

「えっ。家でやるん。」

と驚きつつも、とてもうれしそうに案内の紙を飾っている父を見て、なんだか私もうれしくなった。

夕方、わが家は祭りの会場に大変身した。射的、スーパーボールすくい、フルーツあめ、わらびもち、ベビーカステラなどの祭りの定番が大集合だ。どれも手作り感が満載で、射的はトイレットペーパーの芯や消しゴムだし、スーパーボールすくいで桶に浮かんでいるのは仮面ライダーの小さな人形だし、それをすくうポイはワイヤーに半紙をはさんで作ったものだ。私と母のお菓子づくりは、あめが固まらなかったり、ベビーカステラがこげたり、ハプニング続出だった。でも、そこがいいのだ。私が中学生になってからは、いそがしくて一緒に料理をする機会が減っていたが、私の失敗を母が臨機応変にフォローするという、母と私の見事なコンビネーションは健在だった。それでも、実際の祭りと比べたらクオリティーの低いものばかりだったが、それがおもしろかった。弟手作りの射的大会では、私は1番高い得点の的を一発で倒してなんと優勝してしまい、翌日の昼ご飯を自由に決められる券をゲットした。これはおうちならではだ。スーパーボールすくいでは、何個すくえるか対決のはずが、手作りポイの半紙が強すぎて、家族全員が桶に浮かんだ全ての人形をすくうことができてしまった。これもおうちならではだ。有名な和菓子屋で販売されている、タピオカの代わりに小さなわらびもちが入ったドリンクをまねて母がつくったドリンクは、小さく切ったはずのわらびもちがドリンクの底で全てくっついてしまい、とてもストローでは吸えなかった。これもおうちならではだ。普通の夏祭りではありえない事がたくさん起きて、普通の夏祭りより楽しくて、普通の夏祭りよりたくさん笑った。

その夜、皆で花火をしていると弟が言った。

「来年もしような。来年の8月14日。」

私と弟は考えが合うことがめったにないのに、珍しい。私もちょうど同じことを考えていた。

来年の今ごろ、私はどうしているのだろうか。高校生になって、忙しい夏休みを過ごしているのだろうか。家族といるより、友達といる方が楽しいと感じるのだろうか。家族で夏祭りなんて子供っぽいことはもうしないと思うのだろうか。大人に近づくにつれて、考え方は変わっていくし、いろんな事も忘れていく。でも、家族と過ごした楽しい思い出や家族の大切さだけは、いつまでも忘れずにいよう。この夏祭りは、私がそんな事を考えるきっかけとなった、この夏1番の思い出だ。

保護者の部



息子がくれた青春

長船中学校 竹内 直樹

「野球やりたい!」

仕事から帰ると、小学2年生になったばかりの長男が嬉しそうに駆け寄って来た。前から妻の友人が地元のスポーツ少年団に誘ってくれていたことは知っていた。しかし息子たちはこれと

いって興味がなく、スポ少の話をしていても

「行かん、野球はおもしろくなさそう。」

と全くやる気がなかった。

中学まで野球少年だった私は、やったこともないのに「おもしろくなさそう」と言われ複雑な気持ちだった。あの達成感や団結力を感じてほしいと思う反面、辛く苦しい思いもたくさん知っている。用具を何度も買いかえるのはお金もかかる。何度か誘いを受けた妻が

「お願い、体験会だけでも行ってみよう?」

と長男に懇願していた。渋々連れて行かれた長男は、初めは恥ずかしそうにしていた。初めて手にするバットやグローブでは、そう簡単には打てないし捕れないにもかかわらず、担当してくれたコーチからは、

「上手じゃなあ!いいね、もう1回!」

と、おだてられ、体験終了後にはお土産でもらったお菓子とジュースでさらに上機嫌になり、すっかり「野球って楽しい!」と心変わりしていた。妻は思わぬ長男の前向きな姿勢を喜び、私が仕事から帰るのを待っていた。やると決めたことは自分の口できちんと伝える、と約束していた長男が、いつもの「おかえり」と言ってくれるより先に、「野球やりたい!」と嬉しそうに駆け寄って来たあの日、私の第2の青春が幕を開けたのだった。

長男がスポ少に入団してから、我が家の週末は野球で染まった。私は保護者との関わりをもつことが少なく、自分の子ども以外の子どもたちと接する機会もほとんどなかった。初めてコーチとして練習に参加した日は緊張した。そんな私と引込み思案な長男を、団員の子どもたちや、ボランティアの父親コーチたちは温かく迎え入れてくれた。長男は競争心が乏しく、マイペースに土いじりをしていることが多く、やると言ったわりにはのんびりしていた。私はというと、グラウンドに響く掛け声やボールを追いかけて走る子どもたち、バットにボールが当たる爽快な音、懐かしい記憶が鮮明に蘇り、緊張はすぐに高揚感に変わった。熱の入った私は、子どもたちに本気で接した。一生懸命私の指導にくらいついて来る子、拗ねていじけてしまう子、やんちゃで、かつての自分のように言うことを聞かない子。一緒に野球をして過ごす日々が増えれば増えるほど、子どもたちが可愛かった。決して子どもの扱いが上手ではない私に人懐こく絡んでくる子どもたちを、心の底から「強くしてやりたい、勝たせてやりたい」と思うようになっていた。

長男もチームメイトや環境に恵まれ、内向的な性格ながら学年が上がるにつれ、野球のルールにとっても詳しくなり、いつの間にか私と対等にキャッチボールをしたり、プレイする姿に成長を感じるようになった。私も妻もこうして長男が人の輪を広げると共に、私たちにもいろんな出会いや成長があることがとても嬉しかった。

けれど、6年生になり最後の大きな大会の前に、皆がひたむきに頑張っている中

「どうせ負けるし。」

という長男の弱い一言が出た時、私は切れた。

「お前1人で野球をやっていると思うな！やる前から諦めるくらいなら、試合に行くな。」

今まで休日を野球に費やしてきて、楽しかったことばかりではない。しんどくて、歯がゆくて、投げ出したいと思ったこともあった。それでも少しずつ野球を好きになっていく長男が皆と力を合わせて目標を達成する喜びを経験してほしい。慕ってくれた子どもたちを勝たせてやりたい。その一心でやってきた。最後の大会を前に、私の怒りが長男にどう響いたのか分からないが、長男はその日、とても落ちついてマウンドに立っていた。団員からも、勝ちにいくという一丸となった気持ちがひしひしと伝わった。試合は延長戦になり、最後まで投げぬいた長男と、それを支え諦めずに共に戦ってくれた皆は、サヨナラで負けた。

野球を始めて5年、決して率先してやる子ではなかったが、暑い日も寒い日も、どんなに朝が早くても愚痴をこぼさず続けた長男。私は何度怒鳴ってしまっただろう。何度誉めてやれただろう。熱くなりすぎる私によくついて来てくれたと思う。仲間と共に頑張る闘志や負けて悔しいと思えた経験は、この先子どもたちを支えていこう。長いようで、あつという間の5年間、こんなに子どもたちと接することが楽しくて、熱くなれると思わなかった。私の思いが子どもたちに少しでも届いて、この先何かの役に立てたり、反面教師にしてくれたりしたらいいと思う。長男にはとても感謝している。私のコーチ生活は、もう1度やって来た青春のようで、本当に貴重な時間だった。



物を大切にすること

行幸小学校 東田 実香

我が家には、小学校3年生と年少児クラスの娘がいます。性格は面白いほど正反対です。上の子は争い事が大嫌いで平和主義、どちらかという気弱で、怒られるとくじけるタイプ。下の子は気が強く負けず嫌いで、お友達ともよくめめます。怒られてもくじけるどころか逆ギレです。

ある日、出された夕食を2人とも残したことがありました。下の子は、買ってあるお菓子を食べたくて、夕食を残す作戦に出たようでした。

「かあちゃん、もうお腹いっぱいすぎて痛くて食べられない。」

「そうか、じゃああのお菓子も食べられんなあ、残念じゃなあ。」

するとあわてた様子で首を横に振り、

「あ、何かお腹痛いの治ってきたから食べられる。」

と、残りを食べ始めました。一方の上の子は、本当にお腹がいっぱいだったようで、

「かあちゃん、食べられん、どうしよう。」

「じゃあ仕方ないからごちそうさませよう。」

するとしばらく考えた後、

「やっぱり頑張って食べる。」

と言って食べ始めました。しかし、3口ほど食べた所で突然泣き出してしまいました。

「どうしたん？お腹いっぱいなら無理せんでええよ。」

「だって残したら食べ物がかわいそうなんじゃもん。私が食べんかったら捨てられるんじゃろ？」

それを聞いて、私は少し反省しました。特に今はコロナ対策で、子どもの食べ残しはもったいないなと思っても捨てています。食べ物を粗末にしないという、大人が忘れかけている心掛け

を大切にするためにも、親が気を付けて、子どもが食べ切ることができる量を用意しようと思いました。

また別の日には、壊れた水筒を買い替えました。新しい水筒を渡した時に、

「じゃあ前の水筒は壊れているから捨てるよ。」

と話すと、下の子は、

「いいよ!」

とあっさりした返事だったのですが、上の子は、

「え、捨てるん?嫌じゃ何で?」

「だって壊れとるからお茶が漏れたら困るじゃろ?」

「嫌じゃ嫌じゃ。水筒がかawaiiそう。今までありがとうって飾るから捨てないで。」

と泣くのです。確かに小さい頃から、1度買ってもらった物にはとても愛着が湧くようで、赤ちゃんの頃からのおもちゃも大事に残しています。覚えていないだろうと思ってこっそり処分した物を、

「そういえばあれってどこ?」

と聞かれた時は、

「あれはかあちゃんの友達の子どもにあげたから、もう無いんよ。」

と、とっさに嘘をついてしまいました。すると、

「そうなん、じゃったらええよ。」

と言ったのです。誰かが使ってくれるなら納得がいくようでした。思い返せば、下の子にお下がりとして服やおもちゃ、絵本を譲る時は、お気に入りだった物でも喜んで手離していました。それを踏まえて、物を処分する時は、

「これはそろそろお姉ちゃんには必要ないから妹にあげようか。もし妹がいらんって言ったら、かあちゃんの知り合いにあげてもいいかな?」

と聞くことにしました。すると、本人も気持ち良く物を手離せるようです(実際には内緒で処分したりしていますが)。

今、私たちの周りには食べ物も物資もたくさんあり、お金さえ払えば何でも手に入ります。その環境で、物の大切さを教えるのは非常に難しいことだと感じています。今、上の子がもっている「もったいない」という感覚を、これからももち続けていけるように、親として何が出来るかを、日々試行錯誤しながら試していきたいと思っています。



いつもと違う、いつもの夏休み

行幸小学校 板野 景子

「今日は大富豪できる?」

小学校6年生の息子が、この夏休みの間ほぼ毎日言っていた。「大富豪」とは、トランプゲームのことだ。5人家族の我が家では、長男が小学校低学年の頃からみんながリビングに集まると、自然と「大富豪」が始まっていた。子どもたちはそれぞれ成長し、自分のことは自分でできる年齢にはなったが、その分自分の部屋で過ごす時間がずいぶん増えた。長男と長女に至っては、食事以外は自分の部屋で過ごしているという日もあるくらいだ。こうして、長男が高校生になった頃から「大富豪」の頻度は激減した。それでも、従兄弟が泊まりに来た時や、みんなの気分が乗った時には、「大富豪」大会が行われていた。時々開かれるその大会が楽しくて仕方がないのが、まだ小学生の次男なのだ。

今年の夏休みは、コロナの影響で、いつもとは過ごし方が違った。長期休みにはいつも実家に帰って来ていた姉一家も、東京からの帰省は自粛した。また、家族で毎年必ず行っていた温泉旅行も行かなかった。夏休みの期間が短かったこともあり、家でゆっくり過ごすことが多かった。

無観客で行われた甲子園交流試合。テレビの前で次男と2人、ほとんどの試合を観戦した。思えば去年は、ひと夏に3度も足を運ぶことのできた甲子園球場。試合に懸ける強い想いは、ベンチ入りした選手だけではなく、それを支えてきた家族や応援している仲間の姿からも容易に想像でき、それを思うだけで胸が熱くなったのを覚えている。次男も、メガホンを片手に、試合の行方を必死で目に焼き付けていた。しかし、今年は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、夏の全国高等学校野球選手権大会は中止となり、春の選抜高等学校野球大会に出場予定だった32校が、1試合限りの交流戦を開催してもらえることとなった。この交流試合では、特別内野指定席と呼ばれるエリアで、関係者と選手の家族のみが観戦を許され、間隔をとって座り、静かに見守っている。例年であれば、意外と小さなプラスチック製の椅子に、隣の人と肩が当たってしまうくらい、ぎゅうぎゅうに詰めて座っている満員のアルプス席から、吹奏楽部員の演奏、チアリーディング部員の応援も加わって、暑い熱い夏を過ごしていたはずだった。1年前の私と次男は、夢を叶えた様々な立場の人の熱気を感じていた。この夏、夢の舞台に立てた選手たちは、本来なら3月にこの聖地に立つはずで、さらに夏の大会に向けても必死で練習し、勝敗にかかわらず、かけがえのない経験を積んでいくはずだった。テレビの向こうの彼らの姿に、色々な想いが込み上げてくる。1試合だけではあるが、甲子園の土を踏むことのできた選手たちはみな、「感謝」という言葉を残していった。それは、自分たちが甲子園で試合ができたからだけではなく、全国の野球部員の多くが、そのチャンスを失っていたからだ。チャレンジする機会を失った人は、高校野球部員だけではない。挙げればきりが無いほど、多くの人たちの目標や夢、些細な楽しみさえも失われた。日本中、世界中の人々が、我慢したり苦しんだりしていることに心が痛むばかりだ。

我が子も、それぞれに影響を受けた。体育会がなくなったり、修学旅行に行けなかったり、研修旅行が中止になったりと、今しか経験できなかったであろうことがたくさん失われた。ソフトボールをしている次男は、やっと自分たちの代になって頑張ろうとしていた時に緊急事態宣言が出た。ことごとく公式試合がなくなった。目標としていた県外での大きな大会もなくなった。次男は大きな目標を失った。何のために頑張ればいいのか、いつからみんなと練習ができるのか、いつになったら試合ができるのか、不安でいっぱいの様子だった。でも、次男は練習を続けた。それは、一緒に頑張ってきた仲間と、また大好きなソフトボールをしたいと思っていたから。そして、「今できることを精いっぱい、腐らずにやっつけていこう。」と、励ましてくれた指導者がいたからだと思う。コロナにたくさん悩まされ、これからもどんなことが起こるか分からないが、努力してきたことは無駄にはならないこと、今ある当たり前のことにも、感謝して過ごすことができるよう子どもたちには伝えていきたい。

夏休みの最後の夜、久しぶりに家族5人で「大富豪」をした。勝っても負けても、そこには家族の笑顔があふれていた。どこも行けなくても、誰とも会えなくても、こうして家族で笑って過ごしていることが当たり前のように何よりの幸せなのだと、改めて実感した夏休みのしめくりだった。



会話で気付くこと

行幸小学校 小林 未弘

わが家は、私と小学校3年生の長女、4歳の長男、2歳の次女の4人家族です。

子どもたちは3人とも言葉の発達が早く、小さな頃からおしゃべりで、家では常に誰かが何かしゃべっているような状態です。

私は仕事を終えて、子どもたちを迎えに行くと必ず「今日、学校(保育園) どうだった?」と聞きます。子どもたちは口々に、その日楽しかったこと、嬉しかったこと、悔しかったこと、辛かったこと、腹が立ったこと、面白かったことなど、思ったことをたくさん話してくれます。その会話の中で子どもの成長を感じることもたくさんあり、私にとって、仕事で疲れたあとの楽しみとなっています。何より、日々をバタバタと過ごす私にとって、その会話で子どもの気持ちを知る大切な時間でもあるのです。

ある日、いつものように長女へ、
「今日学校どうだった?」

と聞くと、

「楽しかった。」

とだけ返ってきました。いつもは色々話してくれる長女のあまりにも簡潔な返答に、何かあったのかと心配していると、

「ママは今日仕事どうだったん?疲れたこととか、嫌だったことでもいいから聞かせて。いつも私のお話を聞いてくれてありがとう。」

と言われました。それは、疲れた私を気遣ってくれた長女の優しい言葉でした。

仕事をしながらする育児は、本当に忙しく、まして1人での育児は1日24時間では足りないくらいです。毎日の会話で子どもの成長を見てきたつもりでしたが、知らない内に、誰かを思いやることができるようになっていたことに驚きました。私が子どもの気持ちを知ろうとしていた会話は、子どもが私の気持ちを知ろうとしてくれている会話でもあったんだなということに気付かされました。

日々の会話がなければ気付くことができないこともたくさんあります。これから先、子どもたちが言いたくても言いたくないことも出てくるだろうと思います。いつか来るかもしれないその時まで、子どもたちの小さな気持ちの変化にも気付けるように、日々の会話を大切にしていきたいです。



私と子どもとマッサージ

行幸小学校 森本 章江

「ふふふ、意外と効いているかも。」

夜、運転している車内で、体が少し楽になっていることに気付き嬉しくなった。

我が家には、10歳、3歳の娘、7歳の息子がいます。毎日元気いっぱい、母の怒る声は無音のようです。3歳差の子どもたちは成長具合も様々で、それぞれの発達が違うのも見ていて楽しいです。両親が共働きの我が家では、家族全員でゆっくりと過ごす時間は少なく、そのせいか、

私がゴロゴロまったりと過ごしていると、子ねこのように周りにまとわりついてきます。3人3様の甘え方ですが、疲れた私を癒そうと試行錯誤してくれます。

子どもしてくれるマッサージは、初め肩たたきから始まるように思います。「肩たたき」の歌があるからでしょうか、3人とも肩たたきを最初にしてくれました。子どもが大人に対する感謝や労いを表現してくれる関わり方だと思うのですが、してくれる嬉しさやありがたさの反面、実際マッサージの効果があるのかと言われると今一つの気がします。どちらかと言うと、心がほっこりとなることで精神的に癒されるように思います。

さて、3人のしてくれるマッサージも様々で、まず長女がうつぶせで寝ている母に気付きます。「母さん、マッサージしてあげようか?どこ?ここ?」上から目先で母に問う。マッサージをしてくれる回数が増えてきたからか、丁度良い力加減で体をほぐしてくれます。

「う〜。気持ちいい。お姉ちゃんさすがじゃな。めっちゃ効くわあ。」

それを聞いた息子。姉ちゃんに負けずとマッサージに参戦してくる。

「母さんここ?どう?」

妙に優しいタッチで、気持ちいいというよりくすぐったい。たまたま、

「ははは。気持ちええけど、くすぐったいわ。もうええわ。くすぐったい。」

笑ってくすぐったいともだえる母を見て末っ子

「母さん、何しよん。こう?」

マッサージではなく、くすぐってくる。真面目にしていた長女は、母を気持ち良くさせようと頑張っているのに弟妹に邪魔され怒る。

「もう、あんたらせんで。」

こうなったら終わりの合図、弟妹は、母と遊んでいたのに姉に怒られ、マッサージはどこへやらで幕が下りた。

今年の2月から現在にわたり、私たちの日常が目まぐるしく変化しました。日常であった通勤・通学ができなくなり、家族で過ごす時間が増えた。以前は嬉しかった家族の団欒が窮屈となる毎日となりつつあった。その中での人と人とのふれ合いが貴重なものとなり、そのことに感謝し、より一層大切なものになったように思いました。

私の職業は看護師です。現在の状況の中、自分や家族が感染しないだろうか、私がこの仕事をしていることにより、子どもたちの迷惑にならないだろうかと不安になることもあります。夜勤の仕事もあるため、子どもたちが寝静まってから出勤し、暗い道中を運転しながら通っていると、少しもの寂しく感じることもあります。その中で、お風呂上がりを受けた子どもたちからのマッサージは、私の心と体に静かに効いていることに気付きました。今一つとっていた子どもたちからのマッサージに、子どもたちの成長と温かさを感じ、この不安気な私の背中を力強く支えてくれることに嬉しくなり、自然と笑みがこぼれてきました。ささいな出来事ですが、一つ一つの出来事が私の原動力となっています。子どもたちの成長を見守っていきながら、今この状況を一緒に過ごせていることを大切にしていきたいと思えます。

瀬戸内市優良賞一覧

〔小学生の部〕

題名	所属	氏名
ぼくは、おにいちゃん	牛窓北小学校 1年	高橋 颯 介
じいじみたいになりたいな	美和小学校 1年	近藤 結 衣
夏休みのおたのしみ	国府小学校 2年	赤木 梨 沙
ぼくの大きいおじいちゃん	行幸小学校 2年	太田 和 孝
ぼくの妹 りっちゃん	牛窓西小学校 3年	爲房 波 琉
ぼくは、おぼうさん	牛窓北小学校 3年	安良田 悠大
大好きな年上の弟は、ぼくの家族	邑久小学校 4年	内田 航 太郎
おじいちゃんの野菜	行幸小学校 4年	守時 陽 花
ぼくのおじいちゃん	今城小学校 5年	中野 瑛 太
夏休みのテレビ電話	国府小学校 5年	長井 優 沙
新しい家族とネコのワー子	牛窓西小学校 6年	八田 そ よ

〔中学生の部〕

私のじまんの両親	邑久中学校 1年	土方 悠 乃
尊敬するお父さん	邑久中学校 1年	城山 真 輝
私の役割	長船中学校 2年	松浦 朋 花
感謝の気持ち	長船中学校 2年	大倉 由 姫 乃
雨のち、晴れ	邑久中学校 3年	渡邊 万 奥
私の祖父と祖母	邑久中学校 3年	山本 遥

〔保護者の部〕

今年のお盆	美和小学校	山崎 好 美
家族のふれ合い旅	美和小学校	岡崎 智 彦
新しい家族	美和小学校	久山 奈 保 子
長男の成長	行幸小学校	益田 美 春
母になってわかった事	行幸小学校	八木 亜 矢
家族	行幸小学校	浦山 真 奈
夕食後の時間	行幸小学校	林 弥 生
遺伝	行幸小学校	浦田 起 久 子
最後は笑顔で	行幸小学校	片山 環 実
新しい生活様式	行幸小学校	山本 祐 里

瀬戸内市佳作賞一覧

〔小学生の部〕

題名	所属	氏名
3にんきょうだい	牛窓西小学校 1年	松下 結 莉
スーパーマンのおにいちゃん	今城小学校 1年	原田 真 仁
わたしのひいおじいちゃん	牛窓東小学校 2年	岡崎 咲 和
わたしのおとうさん	牛窓西小学校 2年	植木 初 奈
わたしのおとうと	邑久小学校 2年	安藤 茜 音
みんなをえ顔にさせたからあげ	邑久小学校 2年	柴田 亜里奈
私のお姉ちゃん	今城小学校 2年	川相 穂 乃
犬がおもしろい	行幸小学校 2年	長谷川 拓 夢
マラソンと海とゴミ	牛窓東小学校 3年	床 季 那 保
わたしと家族のやくわり	邑久小学校 3年	田村 千 糸
ぼくの弟	邑久小学校 3年	石崎 善
わたしにとって家族とは	邑久小学校 3年	北野 くるみ
ぼくのお兄ちゃん	今城小学校 3年	石坂 栄 樹
わたしの大かぞく	美和小学校 3年	松谷 亜 依
新しい家族	牛窓西小学校 4年	久保田 春 芳
私の家族	美和小学校 4年	近藤 碧
わたしの自まんのお母さん	牛窓西小学校 5年	松下 紗 衣
おばあちゃんのこっ折	牛窓北小学校 5年	高祖 愛 弥
愛犬との別れ	邑久小学校 5年	弘保 玲 旺
家族に支えられた木琴練習	邑久小学校 5年	今田 貴 広
いつもとちがう夏休み	今城小学校 5年	瀬濱 将 悟
両親の背中を見て育つ私	行幸小学校 5年	富田 彩 七

〔中学生の部〕

かげで支えてくれる家族	邑久中学校 1年	野崎 大 智
イベントや、思い出を残す	邑久中学校 1年	杉田 優 希
叶わなかった願い	牛窓中学校 2年	鳴坂 美 沙
私と家族	邑久中学校 2年	兒島 美 結
三人家族	邑久中学校 2年	中井 光 沙
祖母の入院	牛窓中学校 3年	野口 莉 紗
わが家	邑久中学校 3年	岡本 樹
私のお母さんってスゴイ！	邑久中学校 3年	虫明 音 芽
つばめのくる家	長船中学校 3年	橋本 実 怜
ありがとう	長船中学校 3年	藤原 亜花音



ほがらか家族

明るい家庭づくり作文集
(瀬戸内市優秀賞受賞作品)

令和3年2月発行

編集発行

瀬戸内市教育委員会

岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会

〒701-4392 瀬戸内市牛窓町牛窓4911

瀬戸内市教育委員会社会教育課内